

[報告]

新潟市新津美術館の ボランティア活動の紹介

—読み聞かせ活動を中心として—

奥村 真名美、斎藤 未希

新潟市新津美術館 学芸員

新潟市新津美術館のボランティア活動の紹介

—読み聞かせ活動を中心として—

奥村 真名美、斎藤 未希

はじめに

新潟市秋葉区の花と遺跡のふるさと公園内に位置する新潟市新津美術館は、2020（令和2）年10月に開館23周年を迎えた。

当初は新津市が設置した新津市美術館として1997（平成9）年に開館し、管理運営は財団法人新津市文化振興財団が行ってきた。2005（平成17）年新潟市との合併により施設名を「新潟市新津美術館」と改称。2006（平成18）年新潟市直営に移行。2011（平成23）年5月25日に博物館相当施設に指定され、現在に至っている〔註1〕。

美術館における多彩な活動のひとつに、ボランティア活動がある。この活動は、新潟市美術館が開館して3年を経た2000（平成12）年から本格的に始まった。2020年現在、新潟市新津美術館（以下、「新津美術館」）では42名のボランティア登録があり、企画展広報物の発送補助、講演会やワークショップのイベント補助、絵本の読み聞かせなどで美術館活動を支えてきている〔註2〕。

主な活動のひとつである「絵本の読み聞かせ」は、新津市時代から始まり様々な変遷を経ながら現在まで続いている。今年（2021）は美術館でボランティアの活動が始まってから20年目の節目の年にあたる。そこで本稿ではボランティア活動の歩みを振り返りながら、「絵本の読み聞かせ」活動に注目し、その代表的な活動事例を紹介する。また、これらを通して、今後の活動の展望と課題について考えてみたい。

1. ボランティア活動の歩み

これまでのボランティア活動は、別表のようにまとめられる（別表）〔註3〕。資料に乏しい時期もあるが、その概要をおおまかに捉えることが出来よう。ここでは、活動内容の違いなどから20年の歩みを便宜上「活動初期」「中間期」「現在」の3つに分け、その時期の特徴を紹介したい。

註1 「新潟市新津美術館年報2019」（2020年発行）p.40より。事業例は2015年より各年発行している『新潟市新津美術館年報』のほか、それ以前については『新潟市新津美術館年報2008—2013』（2014年発行）、『新潟美術館開館10周年記念誌●アートに出会う はじめの一歩。●』（2008年発行）が詳しい。

註2 ボランティアの活動期間は1年間で、各年度末に翌年度の活動に向けた更新作業及び新規募集を行っている。募集情報は市報や館ホームページで広報しており、新潟市秋葉区を中心に、近隣在住者で構成されている。ノルマ等は設けておらず、事業ごとに参加者を募り、各々の都合がつかく内容の活動時に自由に参加している。

註3 註1の前提資料のほか、イベント関係資料より読み聞かせに関わるものを中心に抽出して作成。

年度	活動内容など	企画展	備考
2000年度	(ボランティア活動を導入)		イベントごとにボランティア募集
2003年度	(展示解説なども含めたボランティア導入を試みる)		
2004年度	・新津市内のボランティアとNPO法人で絵本の読み聞かせを行う(2日開催)	「いろのまほうつかい エリック・カール絵本の世界」展	
2005年度	・絵本の読み聞かせ活動を中心にボランティアを発足		
2006年度	・絵本の読み聞かせ(4日開催)	「絵と本の博覧会—日本の絵本芸術」展	
2007年度	(ボランティア組織「えほん倶楽部」発足。読み聞かせのほか、展示解説補助、イベント補助活動も継続)		ボランティアグループとしての活動に移行(ボランティア限定イベントも適宜実施)
	・絵本の読み聞かせ(4日開催)	「荒井良二 スキマの国の美術館」展	
	・絵本の読み聞かせ(2日開催)	「広重と北斎の東海道五十三次と浮世絵名品展」	
	・絵本の読み聞かせ(4日開催)	「五味太郎作品展 絵本の時間」	
2008年度	・絵本の読み聞かせ(4日開催)	「いのちへのまなざし—『原爆の図』と丸木俊・スマの世界」展	
	・絵本の読み聞かせ(4日開催)	「あべ弘士と旭山動物園展」	
2009年度	・絵本の読み聞かせ(7日開催)	「ファーブル昆虫記の世界展」	
2010年度	・絵本の読み聞かせ(8日開催)	「モーヤン えっちゃん ええほんのえ」	
2011年度	・絵本の読み聞かせ(4日開催)	「堀内誠一 旅と絵本とデザインと」	
2011年度	・絵本の読み聞かせ(8日開催)	「世界の絵本作家展 絵本の世界へ旅しよう」	
2012年度	(活動内容に「広報補助」業務が加わる)		活動内容が読み聞かせ、イベント補助、広報補助で固まる
	・絵本の読み聞かせ	「手塚治虫展」	
2013年度	・絵本の読み聞かせ(5日開催)	「さとうわきこ絵本原画展」	1日2回実施
	・絵本の読み聞かせ(5日開催)	「仮面ライダーアート展」	1日2回実施
	・大人のための読み聞かせ	「日本画の現在 20年後の横の会展」	「大人のための読み聞かせ—『日本画の現在 20年後の横の会』展から—」として実施
2014年度	・絵本の読み聞かせ(4日開催)	「みんな大好き！ノントン展」	1日2回実施
	・絵本の読み聞かせ(4日開催)	「チェブラーシカとロシア・アニメーションの作家たち」	1日2回実施
2015年度	・絵本の読み聞かせ(4日開催)	「絵本原画展 きかんしゃトーマスとなかまたち」	
	・絵本の読み聞かせ(2日開催)	「山本二三展」	
2015年度	・「希望の木」読み聞かせ	「山本二三展」	
	・絵本の読み聞かせ(3日開催)	「さくらももこの世界展」	1日2回実施
2016年度	・大人のための読み聞かせ	「ヘレンド展」	大人のための読み聞かせ「トゥルティネット〜中・東欧の絵本と寓話〜」として実施
2017年度	・クリスマスコンサート内での朗読	「新潟市の隠れた名品展」	クリスマスコンサートのプログラム内で、1日2回朗読実施
2018年度	・絵本の読み聞かせ	「ぼのぼの原画展」	1日2回実施
	・絵本の読み聞かせ	「エドワード・ゴッリーの優雅な秘密」	1日2回実施
2019年度	・絵本の読み聞かせ	「追悼水木しげる ゲグゲの人生展」	1日2回実施
2020年度	・絵本の読み聞かせ	「不思議の国のアリス展」	1日2回実施

別表 読み聞かせ活動を中心としたボランティア活動歴

（１）活動初期 —2000～2007年度のボランティア活動—

新津市時代でボランティアの活動を導入した当初はイベントごとに募集する方針をとっていた。展示解説ボランティアの導入の検討、実施を経るが当時はその活動を定着させるには至らず、次第に絵本の読み聞かせを主な活動とするようになる。2005（平成17）年には絵本の読み聞かせを中心としたボランティア制度を発足させるに至った。

（２）中間期 —2007～2011年度のボランティア活動—

2007（平成19）年、新潟市が政令市に移行する年度の頃から現在に近い形でボランティアが組織されるようになる。これまで主に展覧会のイベントごとで活動していたが、「えほん倶楽部」というひとつのグループを組織し、読み聞かせのほか多様な活動（イベントでの制作者の補助、子ども向け展示解説など）を行った。

ミーティング等の情報交換も適宜行っており、2008（平成20）年には、「えほん倶楽部」限定イベント「【出前アート特別編】現代美術家・高田洋一さんによるお話＆ワークショップ」を開催するなど、幅広い活動が展開されていた。

（３）現在 —2012年度以降のボランティア活動—

2012（平成24）年度からボランティアの活動内容が、「絵本の読み聞かせ」、講演会やワークショップの運営を補助する「イベント補助」、企画展広報物の封入作業を行う「広報補助」で固まり、活動方法と公募の方法も現在と同じような形態をとるようになった。イベントは活動日が土日や祝日となりがちであるが、「広報補助」業務は平日に設定することも可能で参加者を広く募れるようになった。

2015（平成27）年度頃までは、ひとつの展覧会で複数回「絵本の読み聞かせ」を行ってきたが、2016（平成28）年度以降は実施回数が少なくなる。その理由としては、読み手の減少（固定化）などもあり、負担の軽減を図ったことが考えられる。実施回数の減少は見られるものの、事業ごとに工夫を凝らした読み聞かせ活動を行ってきている。

2. 活動事例の紹介

ボランティアによる読み聞かせ活動は、主に企画展関連イベントとして実施されてきた。イベント規模や準備期間は様々だが、年度ごとに1回講師を招いた「読み聞かせ研修会」を実施し、研修会に参加したボランティアが後日読み聞かせに参加できるというルールを設けている。読み聞かせ研修会では図書館司書を講師とし、読み聞かせの基本から学ぶことが出来る座学と実践を組み合わせることで実施されることが多い。ボランティア同士の研鑽を積む機会も兼ねており、研修では個人の習熟度に応じた助言を講師から受けられるほか、初心者は基礎を学べる好機になっている〔註4〕。参加者は2014年度以降毎年6～8名程度で〔註5〕、ほとんど全員が実際に読み聞かせを実施している状況である。

ここでは、2012（平成24）年度以降に新潟美術館で開催された「絵本の読み聞かせ」をはじめ朗読等、読み聞かせに類する事業の代表的な実施事例を取り上げる。

（１）企画展関連イベントとしての「絵本の読み聞かせ」

企画展関連イベントとしての「絵本の読み聞かせ」では過去5年間の事例の中から、出版物の原画を取り扱った企画展で行った事例を取り上げる。近年では企画展関連イベントとして読み聞かせを年1～2回実施している。会期中の土日に午前・午後に分け2回を開催している。会場は展示室内で行う場合もあるが、主に展示室外の有料観覧スペースに常設している「図書コーナー」付近の床にジョイントマットを敷き、靴

註4 講師は、原則新潟市秋葉区にある新津図書館に派遣を依頼。研修は読み聞かせイベントに活かせる内容で毎年アレンジされており、読み聞かせに適した図書（絵本含む）の紹介や、実践に活かせる助言を得ることが出来る。

註5 事業例は、『新潟市新津美術館年報2014』～『新潟市新津美術館年報2020』（2015年より各年発行）を参照。

を脱いで座るように設営してきた。ここでは、企画展の内容とイベントの内容について紹介したい。

事例1 2018(平成30)年度企画展「連載30周年記念 ぼのぼの原画展」での「絵本の読み聞かせ」

2018(平成30)年7月28日(土)に午前・午後の計2回実施。9名のボランティアが参加した。

展覧会では、いがらしみきおの漫画『ぼのぼの』の連載30周年を記念し、漫画原稿や同氏が手掛けた絵本の原画を展示した。

イベントでは、展示室に原画が展示されている絵本、いがらしみきお『クリスマスのこと』(1998年、竹書房)、『ツイオのこと』(2006年、竹書房)の読み聞かせを行った。会場も通常の図書コーナーではなく、展示室内に特設された図書コーナーに設定した。絵本の対象年齢が「3歳から」だったことや、夏休み時期の実施だったことから、対象は小学生以下を想定し、イベント時間も20分と通常より短く設定していた。実際の参加者は未就学児が多かったが、付き添いで参加した親世代からも反響があった。なお参加者は、展示観覧途中にイベントスペースに立ち寄った人も含め、延べ26名であった(写真1)。

事例2 2018(平成30)年度企画展「エドワード・ゴリーの優雅な秘密」展での「絵本の読み聞かせ」

2019(平成31)年3月2日(土)に午前・午後の計2回実施。9名のボランティアが参加した。

展覧会では、ナンセンスな絵本で日本でも人気の高い米国の作家エドワード・ゴリーの絵本原画をはじめ、書籍やポスターなどの資料約350点を展示した。

会場は通常どおり、常設の図書コーナーにジョイントマットを設置して行った。読み聞かせの絵本はエドワード・ゴリーが携わった作品の中からボランティアが選ぶこととし、一部の挿絵は、展示室内に原画が展示されていた。

ゴリーによる絵本が「大人も楽しめる」と評されることから、未就学児や小学生だけでなく一般の観覧者(大学生以上)も参加者となることが期待された。イベント開始直後は子どもの参加者が多かったが、通りかかった一般の観覧者が途中参加する場面が多くみられた。その要因として、展示室内には挿絵原画と物語のあらすじのみが展示されていたため、物語の内容に興味をもった観覧者が、読み聞かせイベントスペースに気が付き立ち止まったものと考えられる。参加者は延べ40名であった(写真2)。

事例3 2019(平成31・令和元)年度企画展「追悼水木しげる ゲゲゲの人生展」での「絵本の読み聞かせ」

2019(令和元)年5月19日(日)に午前・午後の2回開催。7名のボランティアが参加した。

展覧会では、水木しげるの漫画原稿のほか、妖怪研究者としての側面にも焦点を当て、国内外の妖怪を題材とする資料や多様な作品を展示していたことから、読み聞かせでも鬼や幽霊を題材にした国内外の作品を紹介した。絵本の作者は水木しげるにこだわらず、モーリス・センダック作、じんぐうてるお訳『かいじゅうたちのいるところ』(1975年、富山房)、せなけいこ『おばけなんてないさ』(2009年、ポプラ社)などをボランティアの人たちが自ら選定した。会場は常設の図書コーナーに設営した。

観覧者数の多い企画展だったこともあり、イベント参加者は延べ52名と記録の中で最も多く、追加で椅子の座席も用意した。子どもが床のジョイントマットに座り、保

護者は着座または立ち見での参加となった。子どもたちが身を乗り出しながら聞き入る姿が見られた（写真3）。

事例4 2020（令和2）年度企画展「不思議の国のアリス展」での「絵本の読み聞かせ」

2020（令和2）年8月9日（日）に午前・午後の2回開催。ボランティア6名が参加した。

展覧会では、ジョン・テニエルの素描や希少な『不思議の国のアリス』の初版本ほか、多様なアリスの絵本原画をはじめ、映画、舞台、ファッションなど様々な分野のアリスにまつわる作品や資料約190点からルイス・キャロルの名作の魅力を紹介した。

読み聞かせで使用する絵本はルイス・キャロル『不思議の国のアリス』にちなんだテーマの作品としたが「ネコが主人公の絵本」や「お茶会が題材の本」など選定の自由度は高く、選ぶ本にボランティアの工夫が見られた。

これまでの読み聞かせイベントと異なる点は新型コロナウイルス感染症の拡大防止策を講じての実施となった点である。ほかの文化施設での読み聞かせイベントの状況を参考に、新津図書館司書、当館担当者とボランティアらとともに対策を検討した。ボランティアはマスク着用のまま読み聞かせを行ったほか、会場をソーシャルディスタンスの余裕が保てるレクチャールームに変更し、椅子とテーブルを設置して参加者同士が十分な距離を取って座れるようにした。参加者数も各回先着30名に限定した。参加者の連絡先を控えたうえで全員に参加証を配布し、会場に出入する際には提示していただくようにした。これまでの「通りがかり」の参加者は減ったものの、延べ31名の参加があった（写真4）。各所でのイベントが中止や延期となる中で、子どもたちの遊び・学びの場が求められていたことがうかがえる。

（2）音や映像の演出をともなう「読み聞かせ」

ここでは、その他の事例として演出をともなう「読み聞かせ」を行った事業を3つ紹介したい。

事例1 2013（平成25）年度企画展「日本画の現在 20年後の横の会展」での「大人のための読み聞かせ」

2013（平成25）年10月13日（日）午後、展覧会の関連イベントとして、「新津美術館ボランティアによる 大人のための読み聞かせ —『日本画の現在 20年後の横の会展から—」を実施した。

展覧会の内容は、横の会として活動した日本画家たちの作品を広く紹介するものであった。

この会期中に実施された読み聞かせイベントは、美術館での読み聞かせならではの取り組みを強調するもので、出品作からイメージした絵本や詩を、映像や音楽の演出とともに朗読する内容で行われた。イベントは第1部・第2部の2部構成で午後1時30分から3時30分の約2時間に渡り、新津美術館での読み聞かせとしては過去最大規模となった。

出演者は読み聞かせボランティア7名に加え、ゲストとしてフリーアナウンサーで新潟朗読研究会講師の船尾佳代氏を招いた。さらに読み聞かせに出演しないボランティアからも、複数名が運営や広報に携わった。多方面でボランティアの協力を得られたイベントであったと言える。

これまでの主に子ども（未就学児や小学生等）を対象としてきた読み聞かせとは趣向を変え、「大人のための」と銘打つことで従来の読み聞かせイベントには参加することの少なかった客層にも訴求することを目標にした。イベント名に記された「大人」

とは、大学生以上の親子連れでない一般客や、日本画にとくに興味関心のある観覧者層を指す。

読み聞かせに用いた図書は絵本に限らず、児童文学、昔話、楽劇などから広く集め、「横の会」出品作家の作品とも関連を見いだせるものとした。作品の世界観から連想される絵画や、着想の元となった作品は、読み聞かせと合わせてスクリーンに投影し、イベント参加者が読み聞かせを聞くと同時に作品も見ることが出来るようにした(写真5)。

例えば、展覧会出品作の佐々木裕久《冬の蜃気楼》(1999年)から着想を得たボランティアは、当館の立地する地域にまつわる、にいつの昔話編集委員会『ものがたり にいつの昔話 二』(1996年、新津市)から「羽をなくしたふくろう」を朗読した。また戸田和代作、たかすかずみ絵『きつねのでんわボックス』(1996年、金の星社)など児童向けの絵本も、出品作家の作品を投影しながら行ったことで、通常の読み聞かせとは異なる作品世界の広がりがあった。当日の参加者数は約45名で、年齢層は50代以上が多く、通常の読み聞かせイベントには参加しない客層の参加が大半だった。

なお2013年5月から準備を始めており、18回に及び打ち合わせ等を行っている〔註6〕。通しのリハーサル後にボランティア同士でアドバイスしあうなど、ボランティアが主体となって運営した力が入ったイベントだった。

註6 『新潟市新津美術館年報2008-2013』(2014年発行) p.130参照。

事例2 2016(平成28)年度企画展「皇妃エリザベートが愛したドナウの至宝 ヘレンド展」での「大人のための読み聞かせ」

2016(平成28)年9月28日(日)午後、展覧会の関連イベントとして、新津美術館ボランティアによる「大人のための読み聞かせ トゥルティネット〜中・東欧の絵本と寓話〜」を開催。

この展覧会では、ブタペスト国立工芸美術館やハンガリー国立博物館等が所蔵する高級磁器窯として知られるヘレンド窯の磁器約230点を紹介した。

イベントの趣旨は、ヘレンド窯が築かれたハンガリーの文化を広く紹介する目的も兼ねており、映像などを用い解説する合間に、ボランティアによる中・東欧の絵本や寓話の読み聞かせを行うというものだった。「トゥルティネット」とは、ハンガリー語で「物語」を意味する。ボランティアの参加は10名、美術館職員も演出、台本作成、MCや映像資料作成等を担当しイベント運営にあたった。

本番では音楽を流しながら、ハンガリーの風土や歴史を写真とともに紹介するパートと読み聞かせのパートを交互に演じた。物語が育まれてきた土地の情報を得ながら体験する読み聞かせは、企画展、絵本作品双方の世界観の理解を深めるのに十分な効果があったと推察される。1時間半にも及んだこのイベントには、42名の参加があった(写真6)。

2016年9月の開催であったが、7月に図書館司書を招いた研修会を実施するなど、入念な準備を重ねて当日を迎えている。

事例3 2017(平成29)年度企画展「政令指定都市移行10周年記念 新潟市の隠れた名品展」での「クリスマスミュージアムコンサート」

2017(平成29)年12月23日(水・祝)の午前・午後の計2回、「クリスマスミュージアムコンサート」を実施。例年この時期に実施していた「クリスマスコンサート」に「読み聞かせ」を統合したイベントとして、展覧会の会場内で行った〔註7〕。

展覧会は、新潟市内の学校などにあって普段一般の目に触れる機会の少ない隠れた名品を紹介するもので、絵画(日本画、洋画)、版画や工芸作品等多様な作品を展示していた。

註7 参加は無料で事前予約も不要であるが、会場が展示室内のため「展覧会の当日券が必要」とした。座席は先着80名分用意し、そのほかは原則立ち見の対応をとった。

イベントは作品に囲まれた展示室でヴァイオリンの演奏を楽しむコンサートとして実施。そのコラボレーション企画として、ヴァイオリンの二重奏にあわせて童話や詩の朗読を行った。出演者は、ボランティア7名に加え、ヴァイオリン演奏の阿部智子氏と佐々木友子氏の計9名で、司会は美術館職員が担当した。

コンサートのプログラムは、「朝」、「冬」、「クリスマス」の3つのテーマに沿って構成された。「新潟市の隠れた名品展」出品作を提示し、「この作品のように澄み渡った朝の情景を思い浮かべながらお聞きください」などテーマ選定の参考にした作品に触れてから演奏と読み聞かせを行うことで、展示・演奏・読み聞かせの融合を試みた。演奏した曲目は「G線上のアリア」、「Jingle Bells」や「Joy To The World」など多岐に渡る。読み聞かせ作品は小千谷市出身の作家西脇順三郎『旅人かへらず』（1947年）やレイモンド・M・オールデン原作、竹下文子作、山田花菜絵『クリスマスのかね』（2009年、教育画劇）などを使用した。なお、参加者は途中参加した観覧者を含め、午前・午後あわせて180名の参加があった（写真7）。

本番に向けての準備としては、2017年8月初旬に参加者を募り、10月初旬より読み聞かせする作品の打ち合わせに取り掛かっている。10月30日（月）に1時間の打ち合わせを実施し、事前リハーサルの出欠確認や当日の役割分担の決定、服装の打ち合わせなどが行われ、イベントの大枠を決定されてきた記録が残っている。

音楽と読み聞かせ、そして展示作品との共演の実現を目指した本イベントは、美術館という環境を最大限に活かそうとした試みとして特筆すべき事業であったと言える。

3. まとめ

近年の「読み聞かせ」で多い傾向は、展覧会で取り上げた作家自身の本、あるいはそれにちなむようなテーマでの読み聞かせを行うものである。図書館等での読み聞かせと異なり、展示の世界観の理解を深めることを目的として実施されてきた。そこには展示の理解促進、教育普及効果を狙って読み聞かせ事業を計画してきた意図がある。読み聞かせに使用した本の原画が展示室で見ることが出来るというのも、展覧会の関連イベントならではと言える。

読み聞かせに類する事業の開催回数は2012（平成24）年以降は減少傾向にあるものの、ボランティアの代表的な活動として現在まで続いている。この読み聞かせ事業を継続してこられたのは、美術館の活動に理解を示し応え続けてくれたボランティアの存在と新津市時代からの積み重ねによるところが大きい。読み聞かせイベントの機会が増えることを望む意見も時々頂くが〔註8〕、各々の日程の都合、またほかのボランティア活動とのバランスなどもあり最盛期のような回数では行えていないのが現状である。

「日本画の現在 20年後の横の会展」や「皇妃エリザベートが愛したドナウの至宝ヘレンド展」での読み聞かせ、「政令指定都市移行10周年記念 新潟市の隠れた名品展」の「クリスマスミュージアムコンサート」内の朗読は充実した内容で事業を行え、ボランティアによる読み聞かせの新しい可能性を示すことが出来たと思われる。その一方で準備に相当の時間を要したことは否めず、頻繁に実施するのは難しいと言わざるを得ない。余裕をもって計画し、事業実施出来る環境を整えることが何よりも望ましい。

2020（令和2）年度は、美術館活動に新型コロナウイルス感染症の拡大防止に配慮が求められるようになったことから、読み聞かせイベントにも影響が出た。様々な工夫を講じることになったのは先述のとおりであるが、そうした状況下にも関わらず読み手のボランティアスタッフの協力が得られ、中止や延期等の大幅な計画の変更をすることなく事業を行えたのは幸いなことであった。もうしばらくの間は、対策を求め

註8 年度末にボランティアの反省会を行っており、読み聞かせに思いを寄せる参加者の意見として出ることがある。

られることが予想され、大きな事業として協働するイベントの計画が難しいかもしれない。しかしながら、関係者で知恵を出し合い、「ボランティアによる読み聞かせ」事業を継続していきたい。

また、今回ボランティア活動の歩みを振り返るにあたり紹介出来た事例は一部に留まったが、近年の新津美術館のボランティア活動報告の一記録となり、今後の事業検討の参考になれば幸いである。今回取り上げられなかったほかの事例の紹介は、また別の機会に振り返る機会を持てたらと考える。

謝辞

これまで新津美術館の「読み聞かせ」をはじめ、様々な活動を支え続けてくださった、ボランティアの方々と関係者の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

(おくむら・まなみ、さいとう・みき 新潟市新津美術館 学芸員)

参考文献

新潟市新津美術館『新潟美術館開館10周年記念誌●アートに出会う はじめの一步。●』

新潟市新津美術館、2008年

同上『新潟市新津美術館年報2008-2013』同上、2014年

同上『新潟市新津美術館年報2014』同上、2015年

同上『新潟市新津美術館年報2015』同上、2016年

同上『新潟市新津美術館年報2016』同上、2017年

同上『新潟市新津美術館年報2017』同上、2018年

同上『新潟市新津美術館年報2018』同上、2019年

同上『新潟市新津美術館年報2019』同上、2020年



写真1 「連載30周年記念 ほのぼの原画展」での読み聞かせ



写真2 「エドワード・ゴリーの優雅な秘密」展での読み聞かせ



写真3 「追悼水木しげる ゲゲゲの人生展」での読み聞かせ



写真4 「不思議の国のアリス展」での読み聞かせ



写真5 「新津美術館ボランティアによる 大人のための読み聞かせ
—「日本画の現在 20年後の横の会」展から—



写真6 「大人のための読み聞かせ トゥルティネット〜中・東欧の絵本と寓話〜」



写真7 「政令指定都市移行10周年記念 新潟市の隠れた名品展」での
「クリスマスミュージアムコンサート」